「底が突き抜けた」時代の歩き方 543

全共闘運動は歴史の大転換としての「６８年」にどのように対応しえたのか

評論家の坪内祐三が「『一九六八年』を担ったのは誰だったか？」（『諸君！』０３．１０）で、「１９６８年」を扱った作品が目につくことに触れながら、東大・日大闘争に代表される大学闘争や新宿騒乱事件などのいくつかの出来事を年表的に列挙し、≪映画や演劇、音楽、アートなどの分野でも大きなエポックとなる年だった≫として、『ビッグコミック』や『少年ジャンプ』の創刊、『ガロ』の臨時増刊「つげ義春特集」号での「ねじ式」の掲載、『少年マガジン』での「あしたのジョー」の連載に触れて、こう述べていた。

≪しかもそのエポックは世界的なものであり、パリでは５月革命が起き、ニューヨークのコロンビア大学では映画『いちご白書』で描かれる学園紛争が激化し、黒人解放運動の指導者キング牧師、そして彼の運動に理解を示した大統領候補ロバート・ケネディが相次いで暗殺された。ソビエトがチェコに侵攻し、いわゆる「プラハの春」を奪い取ったのもこの年のことだ。≫

５８年生まれの１０歳（小学４年生）であった彼は当然のことながら、「６８年」に対して当事者感覚はなかったものの、≪日本初の心臓移植手術や『少年ジャンプ』の創刊やＧ馬場がボボ・ブラジルに敗れインター王者を奪われてしまったことや、バッキーの死球をめぐる巨人・阪神の大騒乱事件など≫を通じて、≪１９６８年のリアルタイムを記憶している≫だけでなく、≪そういう私であっても、さらに社会的自我がめばえるにつれ、１９７０年代の中頃から、１９６８年は「１９６８年」という通説として記憶されて行くことになる≫と記している。

彼の冒頭部の記述で目を引くのは、≪歴史家の網野善彦は、ある対談であったか座談会であったかで、この時期の歴史上の変化をとらえて、それは百年、二百年単位ではなく千年単位の大衆化であると、述べていたように記憶する≫と書き留められていることであり、歴史家としての網野の直感は的を射ているだけでなく、「６８年」を「歴史の大転換」として捉えた彼の知者としての鋭さにはさすがと感嘆せざるをえない。ただ、どのような点をもって歴史上の≪千年単位の大変化≫であったのか、彼の生存中に確かめたかった気がする。≪一般に、「１９６８年」と言った場合、日本では、それは、全共闘運動（スチューデントパワー）の大きな盛り上りと結びつけられて記憶される≫と坪内祐三が言うとき、それはその「歴史の大転換」としての「６８年」にもっとも鋭敏に反応したのが学生たちであり、「６８年」に向き合うのに従来のセクト的な運動体で

は不可能であることに気づいて、既成の組織をはみだす全共闘運動をおそらく自然に自己組織していった、とみるべきだろう。
「歴史の大転換」としての「６８年」に対応しようとした全共闘運動という捉え方からはるかに後退した、あまりにも矮小すぎる通俗的な見方を示しているのが、文芸評論家の吉本隆明である。彼は「情況への発言」が成立しうる前提を致命的に欠損させた当時の一連の文章で、「６８年」に気づかぬまま度々言及してきたが、最近出版されたらしい『学生反乱－１９６９－立教大学文学部』（刀水書房）の著者である三人の元教員たちがかつての「学生反乱」を振り返っている０６．２．１８付神戸朝刊の記事に寄り添うように、全共闘運動は「教育改革運動だった」という次の短文を寄せている。
≪全共闘運動は、もともと教育改革の欲求から始まったと思います。
　大学の教授たちは、軍隊での体験や、教育についてどう考えたのかということを何も明らかにせず、戦前とちっとも変わらずに教壇に立っていた。それが日本の戦後の問題、そこをはっきりさせようじゃないかというのが始まりだった。
　安田講堂のバリケードに対して、進歩的といわれている先生たちが警官を導入した時、運動の意味がはっきりしましたね。そこで教育改革という目標を明瞭に定めれば、それなりの勝ち目があったかもしれない。
　だが、党派的なものも入って、漫然たる学生政治運動になり、闘士だった人たちはこれ以上拡散しようがないくらい、社会そのものの中に散らばっちゃった。いい意味で言えば、戦前からある狭い党派性や転向概念をみんな壊したわけです。「夢よもう一度」という発想は全然だめです。徒党を組んで世の中は変わるわけないし、今は、一人一人が人間社会にとっての理想を考え、構想を持ち続ける以外に道がないくらい、暗たんたる状況だと思います。≫
　全文を掲載したが、この短文のなかですら、吉本隆明の意図を超えて、全共闘運動が「教育改革運動」の枠組みを大きく逸脱する闘争であったかが明瞭になってくる。≪もともと教育改革の欲求から始まった≫全共闘運動が戦中派の彼のみるように、≪大学の教授たちは、軍隊での体験や、教育についてどう考えたのかということを何も明らかにせず、戦前とちっとも変わらずに教壇に立っていた≫という、大学内知識人における地の存立の根拠を問うていたなら、そこでの問題はもはや「教育改革運動」の次元には収まらない根元性が開示されていたことになる。問題の追求に耐えられなくなった教官たちが自らの手を汚さずに、機動隊の導入によって事態の収拾を図るという、最悪の反理念的な方法を取ったことによって、全共闘運動がますます教育改革運動としての当初の性格から逸脱していかざるをえなくなった。それなのに、彼は≪そこで教育改革という目標を明瞭に定めれば、それなりの勝ち目があったかもしれない≫などと、不可解なことを言うのだ。
　全共闘運動はそもそも勝とうとする運動ではなかった、というのが彼にはみえていなかったから、教育改革運動として終始展開されていたなら、≪それなりの勝ち目があっ

たかもしれない≫などとトンチンカンなことが言えるのである。彼はかつて『最後の親鸞』のなかで、次のように叙述したことがある。
≪親鸞における＜契機＞（「業縁」）は、客観的なものと主観的なものの恣意性を排除し、いわば＜不可避＞性を深化してゆくとき、当然のように対象である他者の解体にむかうべき構造をもっている。なぜならば、体験を＜不可避＞な契機だけみることは、ひとつには、その＜不可避＞性が、個々人に固有なものに閉じられてゆく傾向を深めるからだ。いいかえれば、すべての＜契機＞は、ただじぶんにだけ固有な＜不可避＞さをもつが、他者にとって＜不可避＞かどうか、まったくはかりがたいものになるからである。もうひとつは、このような＜不可避＞性を深化してゆけば、ついにそれがはじめに出遭った＜契機＞そのものを解体せざるをえなくなる。＜契機＞そのものの解体とは＜信心＞そのものの解体である。このことは親鸞の思想では、「面々の御（おんはから）計」とか「総じてもて存知せざるなり」とかいう言葉によって象徴されている。「この上は念仏をとりて信じたてまつらんともまた棄てんとも面々の御（おんはから）計なり」というとき、親鸞は念仏思想そのものを越境してしまっている。ここに絶対他力そのものをふたたび対象化し、さらに相対化したあげく、ついには解体の表現にまでいたっている最後の親鸞が開始されている。すくなくともわたしには、そうおもえる。≫
　親鸞について書かれていることがどこまで親鸞から離れていく凄さをもちえているかが測れるようにして、親鸞の思想に踏み込まれている。いいかえれば、親鸞について書くならば、親鸞に向かった遠さを仰ぎ見るようにして、その遠さを視界に収めるなかでしか書くことができないし、書いたことにはならないという空気がここには流れている。もっと簡単にいえば、親鸞から離れていく度合いだけ、親鸞についてなにかを書いたことになるということだ。だからここで我々は、吉本隆明が考える親鸞を取り除いてなお残るものに出会えばよいのである。ここで書かれていることに、全共闘運動を挟んで読み取ってみようと思う。
　あらゆる運動には＜契機＞がある。運動は展開されればされるほど、当然のことながら＜不可避＞性を深めていく。逆にいえば、＜不可避＞性を深化させていくなかでしか、運動は展開できないし、持続することもできない。運動はそれ自体の自律性をもつにいたるからだ。つまり、それ自体としての重みをもつようになる。そのとき、≪当然のように対象である他者の解体にむかうべき構造をも≫つ。他者を超えていくといってもよい。全共闘運動が授業料値上げ反対とか寮問題などの具体的で個別的な要求を掲げて、歩を踏みだしたことは明白である。その意味では吉本隆明が言うように、≪全共闘運動は、もともと教育改革運動の欲求から始まった≫。しかしながら、卑小な要求から始まった全共闘運動は闘争を展開していくなかで、問題は授業料値上げ撤回や寮問題などでは片付かないことに気づき始める。運動の＜契機＞を超えて、運動のプロセスにおいて次々と引きずりだされてくるさまざまな解決不能な問題に直面せざるをえなくなってくるのだ。

「大学解体」のスローガンは、大学という＜知＞の領域に蠢（うごめ）く魑魅魍魎（ちみもうりょう）が跋扈（ばっこ）する手の付けられなさの根本的な治療として掲げられたのであって、単に中国全土で吹き荒れた文化大革命の舞台に躍り出た紅衛兵運動の造反ブームに便乗したスローガンではない。「大学解体」を叫んだ学生たちに対して、そのスローガンのもつ意味が強力に跳ね返ってこない筈がなかった。「大学解体」のスローガンはそれを叫ぶ学生たちの自己解体を押し迫りながら全共闘運動を、人間にとっての＜知＞のいかがわしさのなかで人類の歩行を描写たらしめてきたそのありかたにむかって、根元的な問いを提起していたのである。吉本隆明の一文には、「教育改革運動」としての≪＜不可避＞性を深化してゆけば、ついにそれがはじめに出遭った＜契機＞そのものの重さを超え、＜契機＞そのものを解体せざるをえなくな≫って、運動のプロセスを展開していくようになる全共闘運動への一瞥は全くみられなかった。

自分がかつて親鸞について書いたことが、異質な全共闘運動への考察のなかで活かされていないだけではない。教育改革運動としての＜契機＞を解体して、視覚で捉えられない領域に容赦なく踏み入っていく全共闘運動を担っていた学生たちがしだいに追い詰められ、大学の外へと放逐されていくことによって全共闘運動の持続が困難に晒されていったことを、≪党派的なものも入って、漫然たる学生政治運動になり、闘士だった人たちはこれ以上拡散しようがないくらい、社会そのものの中に散らばっちゃった≫という、なんの感興もそそらない拡散的なもの言いで押し流すとき、そこには「大学解体」のスローガンによって自分たちこそがより一層追い詰められ、解体されていく危機に見舞われていた学生たちにとっての真の闘争を垣間見ることがなかった。

≪いい意味で言えば、戦前からある狭い党派性や転向概念をみんな壊したわけです≫などと傍観者的にのたまうことのなかには、なによりも大学闘争以前には評論家・思想家として歩んでこれた吉本自身も、「大学解体」が展開されるにつれて解体されていったという認識が当然ながら除外されている。自分とは無関係な、大学のなかでの「教育改革運動」程度の出来事という把握しかなされていないことが、その一文には如実に示されている。当時も無関係であったし、３０数年後の今も無関係であることを表明しながらかつての全共闘運動にむかってなにかが語れると思い込まれているのだ。つまり、後で気づくようになるということも、彼の人生のなかでは起こらなかったということである。網野善彦が「６８年」について、

≪それは百年や二百年単位ではなく千年単位の大変化であると、述べていた≫とすれば、その網野の把握には自分自身もその「歴史の大転換」に立ち会っていることになるし、＜知＞と交差する領域で生きる誰にとっても無関係ではありえないことを自覚した発言だったのだ。『学生反乱』の著者である元立教大教員たちに取材した記事についても触れておく。「全国で起きた『大学紛争』について、当事者自らがまともに総括した本はほとんど刊行されていない。このままでは非現実的な『神話』になってしまう」と、≪われわれは学生たちに何を突きつけられたのか？　バリケードは何かを変えたのか？≫

という問いを３７年後の今、改めて捉え返そうとして本は出版された。学生側の主張に共鳴して良心的な造反教官として振舞う彼らには、戦中派としての大学に対する怒りが戦後もずっと蟠（わだかま）っており、≪「教育とは何か」「学問とは何か」と問い掛け、「大学解体」を叫ぶ学生たちに、松浦の怒りが共鳴した。「子弟に対する優遇などに甘んじ、古い体質にどっぷりつかっていたわれわれ教員がだらしない。それを痛烈に反省し、自分たちの名誉を守るためにも、古い体制を解体するしかない」≫と起ち上がったのだ。

いわゆる改革派の教官たちは従来の「無為無能な執行部」に代わって、次々と学内改革を進め、学生たちが築いたバリケード内にも教職員自らが突入して、≪けが人を出さずに封鎖解除を成し遂げた≫。彼らの総括はしたがって、「機動隊を入れないで紛争を終息できたことには、満足感はあった」ということと、闘いの結果「カリキュラム改革、入試改革など具体的な成果が確実にあった。“大御所”が威張り、学閥や親分子分的な人間関係が幅をきかせていた教授会の体質も変わった」というところに落ち着く。当時、バリケード封鎖に参加した男性（５７）は、「今思うと、この先生たちは教授会の中の全共闘だったんだね。彼らがやったのは結局、職場改革。大学を本質的には変えられなかった」と話すものの、「われわれには老共闘だ。闘いはまだ終わっていない」と老いてますます壮（さか）んな彼らに対して、「先生たちはまだ頑張ってるな、おれたちも自分の場所で頑張らなければ」と、風物詩のような光景がのどかに切り取られている。

もちろん、この記事のなかには「６８年」は存在していなかったし、当時の全共闘運動が自身気づかぬまま目指そうとしていたアモルフ（不定形）な問題を全く掠（かす）め去っていない。吉本隆明のいう教育改革運動の成功例が、ここに取り上げられているだけのことなのだ。かつての教育改革運動の成果について満足している元教官たちが、大学闘争に対して良心的で誠実に振舞えば振舞うほど、大学闘争を教育改革運動のなかに回収していく役割を果たしていた。カリキュラム改革や入試改革など、あるいは旧態依然の教授会の体質打破など、具体的な目標が明瞭であるだけに、教育改革運動は「大学解体」のスローガンに包まれて、やろうとしていることが霧の中の動きのように定かでなくなりつつある全共闘運動の不安定さをより一層募らせ、吸引していく作用を施した。つまり、「歴史の大転換」としての「６８年」を教育改革運動のなかに圧殺していく成果を、良心的な善意の旗印のもとに上げていったんだ。

おそらく全共闘運動に参加した学生たちの大半が、自分たちの闘争のもつ意味を正確に把握していなかっただけでなく、直感的にも捉えることができていなかった。闘争の永続的展開の様相が煮詰まるなか、くっきりとした展望がみえてこない不安と焦燥感に耐えられなくなっていけばいくほど、元教官たちが高らかに良心的に押し進めていく教育改革運動の力強さに学生たちの全共闘運動が抗する術も勢いももたなかったので、吸引されるままであったと推測される。だが学生たちはそのことを良しとしていたわけではなかったし、どこかが、なにかが違うという漠然とした釈然としえなさを抱きつづけていたであろうことが、「今思うと、この先生たちは教授会の中の全共闘だったんだね。

ただ、彼らがやったのは結局、職場改革。大学を本質的には変えられなかった」という、当時の学生の言葉のなかに読み取れる。

元教官たちも「教授会の中の全共闘だった」かもしれないが、全共闘運動を展開した自分たちとはやはり異なる、「彼らがやったのは結局、職場改革」であって、「大学を本質的には変えられなかった」からだ、という言葉のなかに、彼らの教育改革運動は「職場改革」にすぎず、自分たちの全共闘運動は「大学を本質的に」変えようとする闘いであった、という思いが込められていた。そこに元教官たちによる成功した教育改革運動と、学生たちの参加したはるか未踏の全共闘運動との決定的な隔絶が、見ようとすれば見ることができる。もちろん、全共闘運動が目指した「大学を本質的に変え」ようとした闘争がどのようなものであるか、は当時の学生たちにはわかっていなかったし、４０年近く経過した現在もほとんど把握できていない状態であったが、「職場改革」に修練していくような闘争ではなかったと確言できることのなかに、全共闘運動はかろうじて息づいていたといえるかもしれない。　　教育改革運動を掲げた元教官たちはそれ故に、全共闘運動に全く触れることができなかったが、「大学解体」の茫漠としたスローガンに結集した学生たちは目の前に遮られる具体的な目標を持たなかったが故に、全共闘運動に確かに触れていたのである。この「触れていた」感覚が何年経過しても忘れることができず、だが全共闘運動とは一体なんであったのか、という一向に明瞭にならない問いを通じて「６８年」が射し込んでこようとするのだ。おそらく全共闘世代の「黙り続けること」のなかには、運動体験を饒舌によって拡散させたくないという思いと同時に、「６８年」に確かに「触れていた」感覚をずっと引きずったまま、それに言葉を与えることができない状態が持続されていることが見出される。外からみれば、この一種停滞したような、中途半端なはっきりしえなさは、たとえば、９４．８．２５発行の『全共闘白書』（全共闘白書編集委員会編）の呼掛け人座談会にも次のようにみられる。

三井一征（元東大全共闘／ビル管理会社役員）

「私の場合、「献体の発想」に近いのかもしれません。１９７０年でほぼ運動から切れて、それ以降、全く異質な世界に入り込んでいって、そっちの方がずっと時間的にも長い。にもかかわらず、なんか奥底の方にこだわりというか宿題というか、それがいつまでも残っている。無様な姿しか露呈できないんだけれど、なに一つ宿題の答えは見つけ出してなんだけれども、その不様さを含めて「献体」しちゃう必要があるんじゃないかというのが、直感的動機です。多くの人はモニュメンタルな事件が契機になっているはずなんだけれど、私の場合、そういうのはない。なんていうか日常的に漠然とした乖離の感覚があって、それをことばにしきれないというモヤモヤ。そうした中で離れていくという感じでした。」「おのしろいからやるんですよ、物事は。『言語』は後からついてくる、最初は体が動いていく。後でいろいろ自分で意味づけするだけであって、おもしろかったんですよ。今の世の中の悪いということが起爆剤になってて、ぶっ壊す。ところが、大して壊れやしなかったんですよね。かすり傷くらいで。ギリギリに粉砕されて、

みんな破片になっていったら、とりあえず運動体としていえば単品の市民運動とか、あるいは私みたいに『部分』でやるしかない。ただ『部分』でもそれだけで一生がかかるような性質のものがあって、それが成熟したときに初めて全体図を語ることができたり、統合することができるんだと私は思うんです。しかし味岡さんがおっしゃった『普遍言語』はまだできていない。」

横谷優一（元明大全共闘／企画調査会社経営）

「私は政治学をやりたくて明治の政治学科に入ったんですが、生身の『政治運動』にどっぷりとつかって、結局大学の授業には出ることもなく、７年いました。私が運動に限界を感じたのは、『大学立法』、明治もストライキやりましたけど、あのときの『徹底抗戦』の方針だったと思います。学生自身が抱えているエネルギーの根源というのは、実はもっと違うところにあるということを、私自身は非常に感じていました。我々の世代には、大学に何かあるのではないかというものすごい期待がまだあって、いざ大学に入るとそれと現実のギャップを実感する、同時に政治的な反戦闘争があり、それらが混じり合って、非常に大きなエネルギーになっていったと思うんですけれどもね。（中略）『徹底抗戦』の後もずっと政治活動はしていましたけど、本質的な所からちょっと離れた形でやっているという気持ちがあった。」

高橋　公（元早大全共闘／団体職員）

「『世代としての全共闘』の今日的有用性は、全共闘運動を横で見ていた人も含めて、秩序感覚が決定的に違うことです。秩序の崩壊やリストラを恐れていない。いざというときには、どんでん返しをやっていいんだ、やるもんだという感覚を『世代として』『塊として』身につけている。これは他の世代にはない誇るべき個性ですよ。」

「たしかに全共闘運動があれだけの可能性をもちながら、次世代に継承されなかったのはなぜか。これを自己反省的に意識化していくようにしないと、ネットワークを世代を越えて作り出していくという場合に、おまえら邪魔だというふうに言われる可能性だって、なきにしもあらずじゃないですかね。」

花野忠念（元農工大全共闘／会社経営）

「乱暴に言うと、ぶっ壊す楽しさを知ってしまった世代ですよ、僕たち全共闘は。もっと肉体というか、もっと感覚的なというか……。自分の感覚と『普遍言語』がネジレを起こしながらやっていた。だから、あれだけのパワーがあった。（中略）『壊してどうするんだ』っていう話はもっとエライ人が考えればいいんであってね。もっと『壊す楽しみ』を楽しんでもいいんじゃないかなあ、中年全共闘運動としては。」

全共闘運動体験から２０数年経過した後も、「なんか奥底の方にこだわりというか宿題というか、それがいつまでも残っている」し、「なに一つ宿題の答えは見つけ出」せないまま、「日常的に漠然とした乖離の感覚があって、それをことばにしきれないというモヤモヤ」を抱え込んできたことが、そこでは語られている。政治活動を続けながらも、「本質的なところからちょっと離れた形でやっているという気持ち」をどうしても

拭うことができない。他方で「非常に大きなエネルギー」をもって全共闘運動が展開されていったことにも注目されており、そのエネルギーは「おもしろいからやる」ことを体が求めつづけることによって引きだされてきたし、「ぶっ壊す楽しさ」に夢中になったことも語られている。そして大変重要なことは、「全共闘運動があれだけの可能性をもちながら、次世代に継承されなかったのはなぜか」と問われていることである。おそらく、その「可能性」に踏み込みえなかったことが、次世代に伝えていく言葉や行動を遂に生みだしえなかったのかもしれない。

『全共闘白書』には呼掛けられた人たちの回答者座談会もあり、次のような発言がみられる。

横尾和博（７０年新宿高校卒業。労働組合専従。文芸評論活動にも従事。）

「ちょうど４０歳になった頃、１９８９年の天安門事件とか、総評の解体とか、消費税が導入されたとか、昭和が平成になったとかいろんな情勢の変化の中で、黙ったまま語らないのは、やはりまずいんじゃないか、どんな表現手段でもいいから自分自身を語るべきではないかと思うようになったんです。そこにいたるまで１８年かかったわけですね。

（中略）新聞でこの「企て」の記事を読んで、これは呼掛けに積極的に応えていくべきだろうと。意識的に語らないという人ももちろんいるかとは思いますが、私は自分のアイデンティティである全共闘運動について語るべきだろう、そのまま沈黙して４０代を過ごすわけにはいかないだろうと思いました。そういう時代にきているんだろうという強い思いがありましたので、昔の仲間にこういうのがあるからよかったら応えてみないかということで、アンケートを送り先に紹介したんです。」

萩原共次（筆名。６８年和光大学入学。会社員。１７年間、会社内部の組合活動に従事。）

「年を考えると、もうそろそろ何かやるしかない。自分の今までやってきたことをもう一度問い直して活動していくことが必要なんではないかと思っている時期に、アンケートが送られてきました。

そこで、全共闘運動に関わり、それ以降それぞれ経験をつんだ人たちと会うことによって、学生時代とはまた違った重みのある話ができるんではないかと思いまして……。あの時代は労働者の集会に行っても、ともすれば党派としての建前の発言が多くて本音の発言がしにくいような感じがありました。それから２０数年経って自分の本音からの発言が大切にされるんではないかという期待があって、アンケートを出してみたんです。」

山本美知子（６９年関西大学入学。フリーライター。アメリカに本部を持つ市民団体で活動。）

「私がアンケートを回答したりこの座談会に出ようと思ったのは、自分のアイデンティティと非常に近いところに全共闘運動があると思っているからです。自分の生き方を考える時に、あの頃はああいうふうに考えああだったというように一つの原点になっている。それにもう少しこだわるというか、追究してみたいと思っているんです。

（中略）そういうふうに完全にかつての全共闘運動を否定している人もいるというのがあって、そういう人の所にもアンケート用紙が送られたのかもしれませんね。そういう人たちの声こそ聞きたいと思いますが、多分それは聞けないんでしょうね……。」
萩原「私が抱いている問題は子どもの登校拒否です。初めは他の親と同じようにバタバタしましてね、学校に行け行けと言いました。今の社会で学校に行かないと、結局道が閉ざされると思ってしまうわけです。親としても責任が持てなくなってしまって、追い詰められると一家心中まで考えるようになる。
ちょっと考え方を変えれば、学校に行かなくても生きていけるんだとわかることが、日常生活の中では見えなくなってしまう。学生時代には産学協同路線とか、大学が持っていた矛盾や問題点を指摘してきたにもかかわらず、親になってみると子どもに同じようなことをして、結局自分自身何も総括されていない。」
木村隆美（６９年国際基督教大学入学。建設・住宅リフォーム会社経営。文芸評論活動にも従事。）
「うちも二人子どもがいるのですが、長男は中二の春から、下の娘は小６の秋から学校に行かなかったんですよね。全共闘運動に関わった人の子どもにはひょっとして登校拒否が多いんじゃないかと思います。子どもから観（み）ると、親がよその家庭と違うように思えるというのか……。いじめられたり、直接いじめられなくても何か違和感を感じる原因の一つにそんなことがあるようで、それで行けなくなるということもあったようです。それに僕らの頃はいやなことは徒党を組んで闘争をやれたけど、今の子どもたちはそれができない。学校に行かなくなる原因はいろいろあるんだろうけど、生徒たちが仲間とみんなで正義を掲げて校長や教師たちを批判することができなくなったという問題も一つあると思うんですよ。一人で孤独に悩むしかない。」
山本衛士（６７年日本大学芸術学部入学。彫刻家。杉並区まちづくり研究グループで活動。）
「全共闘世代というのは世界的なジェネレーションだったわけで、人類のスケールで考えて、世界の人類が今後生きていく間に、我々のジェネレーションがどうしていくのか、といったことです。」
山本美知子「若い世代と話していると、『大学紛争』といった言い方をする。私は『大学闘争と言ってよね』と言うんですが……。私たちにとっては思い入れとか体験でもあるものが、彼らには教科書の中で１９６８年に大学紛争があったという形で勉強した公的歴史なんですよ。」
木村「たとえば、権力との闘いだって、好きだから、楽しいからやる、それは確かに僕等が開いた地平だと思う。ただ、それをつきつめると、生活を奪われるとか学校に行けなかったりとかが出てくる。今の若い人たちは闘いをやれば生活できなくなると頭でわかっているから、そこまで誰もつきつめないで、そこそこでやっているわけでしょ。」
横尾「全共闘は私なりに言いますと、『今』と『ここ』とを問うたと思うんですね。だ

から、この９０年代でも、『今』と『ここ』を問うというのかな……。」
木村「分業はやめよう、トータルに一人一人ができなければいけない……それは全共闘が始めたと思うんです。」
山本衛士「何かにも書いてあったけど、我々が生まれた時には焼け跡だったわけで、我々の成長と日本の経済発展とが併行している。戦後の歴史をそのままに生きている。そういう意味でも社会的に注目される存在になっている。何か新しいものが出てくると、パクッと食いついていった世代なんですね。ＶＡＮヂャケットとか、車とか。」
木村「いまどきの若い人たちには、ダメでモトモトだから、やりなさいよ、ダメモト主義でやろうよ、と言うんです。彼らは、ダメと思うからやらない式スタイルなんですよ。僕ら、失敗したことはいっぱいあるわけで、ダメでモトモトと思ってやってきた。若い人はやってもダメだからやらない、と。その違いは、やってダメなことを自分自身で体験すると、次には新しいことをやる展望がみえてくると言うことです。」
山本美知子「でも、やらないでも先が見えてダメがわかってしまうからやらないでおこうというのが若い人たちの中にはあって、それが全共闘世代が後に続く世代に残した悪しき影響なんでしょうね。」
山本衛士「次を目指すアクション・プログラムなり、哲学なり、全体を見ようとしているのだけれども、なんとなく感じではわかっても、具体的に何であるかがわかっていない状況です。それは何も全共闘世代だけの話ではなくて、日本でもアジアでも世界全体でも言えることかもしれませんね。
　その中で、我々の世代として、沈黙を守ってきた人も、ここで声を出して、何を見て何を語り何を表現していくのかだと思います。」
黒田洋一（筆名。６５年関西大学入学。会社員。地域の市民運動グループで活動。）
「僕自身も４年ぐらい前までは、会社人間になりたくないと思いながら、仕事という大きな渦の中に巻き込まれていました。（中略）
　その時たまたま湾岸戦争があって、市民運動の場に足を運んでいるうちに、社会人になってからの生き方を問い直し始めたわけです。全共闘運動に参加しながら、未だに沈黙している人も、殻を破って、負の遺産を清算してもらいたい。残された課題を若い世代に引き継ぐことができるよう、今後も積極的に声をあげていきたいと思ってます。」
横尾「私は１７歳で運動に参加して２２歳で離れるまでのたった５年間ですけれども、そこでの経験というのは自分の一生を規定しちゃったなという感じがしています。そういう意味では自分の人生から全共闘をとったら何も残らないのではないかというほどのアイデンティティを感じます。だから、今ここを問うということ、今を輝いて生きる、全力疾走する、自分の信念を持って生きるという生き方を貫いていきたい。
　全共闘は、ちょっとアナーキーなやり方だったと思うけれど、まず破壊というのがあった。その後に創造が来るという考えではあったんだけど、この５年間の経験でもう見るべきものは見てしまった、別に怖いものはないと思っています。心はいつも全共闘と

いうことで、これからの人生でその経験を大事にいかしていきたい。
（中略）市井の片隅に戻っていった多くの仲間たちが今何をしているのか何を語りたいのか、そういうことにもっと照明を当てていくことを、今後の運動に期待しています。
　また、アンケートを送っても回答をしてこない、いまだに沈黙を守っているというか、２５年経っても語らない語れない人たちにもそれなりにスポットを当ててみたい。」
萩原「学生時代に全共闘を体験した人たちが、それぞれの２０数年を持っています。アンケートに回答を書けなかった人、言えなかった人もいます。その書けなかったこと、言えなかったことを、やっぱり聞きたいし、必要なことであればいかしていきたい。言えるかどうかということは、皆それぞれの状況が違いますから……。しかし、あのとき参加した人たちがそれぞれのものを持っているということは確実だと思います。」
山本美知子「アンケート用紙約５０００通のうち５００通も回答があったのはすごいことだなと思うんですよ。普通だと一枚のアンケートでも無視したくなるのに、応えるのに半日とか一日かかる分厚いアンケートにこれだけ回答がよせられたというのは、自分の答えることでもう一度自分を見つめ直してみようという感じでアンケート用紙を書いた人が多かったんじゃないでしょうか。書いたものをコピーをとって保存している人もいるんじゃないですか。
　回答をよせた行為の中には、熱い時代を生きた人々が、今いったいどうしているのかという素朴な疑問が背景にあると思うんです。それは私たち同世代の中にも、若い人たちにも、あると思います。」
　以上の座談会で強調されているのは、闘争以降２０数年間沈黙してきた全共闘世代は、後の世代に伝えていくべき声を出していかなくてはならないのではないか、ということである。沈黙していてはなにも伝わらないし、このままでは「かつて暴力学生がいて暴れまくり、年を取るとともに体制に飲み込まれていった」ということにすぎなくなってしまう、という焦燥感もそこには滲み出ている。もっともだが、では一体、後の世代に伝えていくどんな声を出していかなくてはならないのか。沈黙にははたしてそんな声が内在しているか。沈黙したままであることが問題なのではない。沈黙もまた、成長しているかどうかが問題なのだ。おそらく彼らの沈黙には全共闘運動の記憶が息づいているにちがいない。その記憶は全共闘運動への記憶であると同時に、全共闘運動からの記憶としてもあるが、全共闘運動への記憶としての沈黙について問題とするだけでなく、それ以上に全共闘運動からの記憶としての沈黙について問題とする必要があるだろう。
　したがって、後の世代に伝えていかなくてはならないことは、全共闘運動への各人の記憶ではない。各人への全共闘運動からの記憶である。全共闘運動への記憶であるなら、各人がそれぞれに語るべき言葉をもっているとして、その言葉に全共闘運動からの記憶が覆い被さっていることが沈黙をつくりだしているのが感じられる。それ故に、その沈黙が明らかにされるように声が発されなくてはならないのであって、全共闘運動への記憶に基づいてどんな声でも上げよ、というものではない。全共闘運動からの記憶が沈黙

というかたちをとらざるをえなくなっていることが重要なのであり、全共闘運動が各人にどのような記憶の断片を刻み込んできているのか、を各人が明らかにしていくのに、いまどのように生き、考え、語っているか、がやはり問われつづけているにちがいない。

２００６年5月１４日記